

Title	書評：友添秀則著 『体育の人間形成論』
Author(s)	中澤， 篤史
Citation	教育と社会 研究， 21： 31-33
Issue Date	2011-12-01
Type	Journal Article
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10086/26389
Right	

書評：友添秀則著『体育の人間形成論』

一橋大学 中澤篤史

1. 概要

本書は、スポーツ倫理学・スポーツ教育学を専門とする著者が、博士論文を元にして、そのタイトル通り、「体育の人間形成」について論じたものである。本書の目次は次の通りである。

序章	問題の所在と本研究の課題
第1章	体育における人間形成研究のための予備的考察
第2章	体育の学習指導要領における人間形成内容の検討
第3章	戦後日本の体育における人間形成論の諸相
第4章	先進諸国における体育の人間形成論
結章	体育における人間形成論の構造

序章では、問題の所在と研究の目的を述べた後、先行研究の検討が行われ、取り組む課題が示される。筆者は、昨今のいじめ・自殺・暴力行為・不登校を子どもの「人格的危機」と認識し、体育においても「社会性や道徳性の育成を主眼とした人間形成の問題が緊急の追求されるべき」とであるという。そうした問題関心から、本書の最終的な目的を、「体育における人間形成論の構築」に設定する。この問題関心と目的に照らして、先行研究が、「体育の哲学的研究」「体育の社会学的研究」「体育の心理学的研究」「スポーツ倫理学領域における人格陶冶研究」「スポーツの教育学的研究」に分けて検討され、それらの問題点が、本書の具体的に取り組む課題として提示される。すなわち、①人間形成概念の検討と体育における暫定的人間形成概念の考察、②体育の学習指導要領における人間形成的内容の分析、③体育における人間形成に関わる諸提案の分析、④体育における人間形成に関わる民間教育研究団体の諸提案の分析、⑤先進諸

国における体育の人間形成論の分析、⑥体育における人間形成論の明確化及びその提案、の6つである。

課題①に取り組む第1章では、先行する論者の議論を手がかりに、「スポーツ」「体育」「人間形成」概念を検討しながら、「体育における人間形成」を「体育という営みの中で、体育という教科に対応する文化領域の文化を媒体に、体育教師が学習者を対象に一定の価値的な人間像を目標にして、学習者のうちに社会性および道徳性が形成されるように働きかける営みである」〔規定1：評者注〕と暫定的に規定する。

課題②に取り組む第2章では、体育における人間形成の変遷を、「戦前」「生活体育（終戦～1950年代末）」「体力主義体育（1950年代末～1970年代前半）」「楽しい体育（1970年代前半～現在）」と時期区分し、それぞれの特徴を「めざすべき人間像」「体育理念」「体育の目標」「主要教材」「学習論」の観点から分析している。

課題③④に取り組む第3章では、代表的体育学者の竹之下休蔵・丹下保夫・出原泰明・城丸章夫・水野忠文・久保正秋・石垣健二、そして代表的民間教育団体の学校体育研究同志会・全国体育学習研究会が論じてきた体育と人間形成の関係を分析し、そこで人間形成的学習の具体的な目標や方法論の議論が欠如している点を指摘している。

課題⑤に取り組む第4章では、戦後日本において議論が欠如しているとされた人間形成的学習の目標や方法論を考えるため、アメリカ・ドイツ・ニュージーランドを事例として取り上げ、とりわけ、アメリカとニュージーランドのナショナルカリキュラムの内容と、アメリカの体育学者・ヘリソンの「体育における責任学習論」を検討している。

課題⑥に取り組む結章では、以上の分析を踏まえて、第1章で暫定的に規定した「体育における

人間形成」が「スポーツ文化」概念を導入することで修正され、「体育という営みの中で、体育という教科に対応するスポーツ文化という文化領域を媒体に、一定の価値的な人間像を目標にして、体育教師が学習者を対象に人間形成的目標や教授方略を用いながら、学習者のうちに社会性および道徳性が形成されるように意図的に働きかける営み」〔規定Ⅱ：評者注〕と再規定される。最後に、「体育の人間形成的学習においてでめざされるべき人間像」は「スポーツを学ぶことを契機として、身体的に道徳的・社会的教養を備えた人」である、と結論されている。

2. 批判

以下では、本書のテーマである「体育の人間形成」に関する学問的な議論を深めることを意図して、あえて問題点に焦点を絞り、本書への批判を3点述べる。

2-1. オリジナリティは何か

本書への第一の批判は、オリジナリティは何か、という点である。全体を通して、多くの先行研究と多くの資料が活用されているが、筆者独自の「発見」が明らかでなく、学術的な新規性がどこにあるのが判然としない。具体的にいうと、第1章では、体育哲学者の佐藤臣彦の議論を下敷きに、体育を〔規定Ⅰ〕と規定した上で、それを結章で「スポーツ文化」と関連させて〔規定Ⅱ〕と再規定した。しかし、そもそも佐藤は、体育をスポーツと切り離し、教育の一部としての体育を考えることを意図し、体育とスポーツを混同してきた従来の体育学を批判したのであり、そこにこそ佐藤の議論の研究史上の意義があった。対して、体育とスポーツを結びつける筆者の議論は、佐藤の議論を再び引っ繰り返すものである。だとすれば、筆者は、従来の体育学を批判した佐藤の議論を反批判すべきだったはずであり、その作業を欠いて安易に体育とスポーツを再び結びつけたとすれば、これは研究史上の後退ではないのか。

第2章では、学習指導要領を見渡しているに過ぎず、資料蒐集上の貢献は無く、分析内容についてもこれまでの体育科教育学が取り組んできた内容を

超えているとは思えない。指導要領を中心資料の一つにするならば、その周辺資料として、いわゆる「解説書」や「実践事例集」も用いて政策と実践の距離感を検討する作業や、その他の政策文書等も用いて政治過程にまで踏み込んだ議論が必要なのではないか。

第3章では、戦後体育の実践論を概括しようとしているが、これも研究史上の到達点である、城丸章夫ほか編『戦後民主教育の展開』や、中村敏雄編『戦後体育実践論』が個別的・包括的に論じた内容を超えているとは思えない。後者の『戦後体育実践論』の執筆には、筆者自身も参加していたのであるから、それとの異同、それと比較した新規性を示すべきではないか。

第4章では、諸外国の体育の動向が丹念に紹介されており、もしかすると比較体育学的に資料上の価値があるのかもしれない。しかし、文献解題の域に留まっている印象をぬぐえない。海外の体育カリキュラムの内容やその背景を紹介することに、紙幅のほとんどが費やされているが、それをどのような規範的立場から評価・批判しているのかわからないのである。

2-2. 身体性を議論しないのか

第二の批判は、前提となる定義上の問題として、体育における身体性を議論しないのか、という点である。本書は、人間形成とは社会性と倫理性の形成であるとして、体育の人間形成を論じるにあたり、身体形成を除外している (pp.53-55)。しかし、身体性を抜きにして、体育における社会性と道徳性を論じることはできないはずである。このことは、認知心理学における身体の位置づけや、近代以降の身体教育の思想史を振り返れば、明らかだと思われる。順に説明する。

認知心理学は、外界、自己/他者、社会の認知を論じてきたが、その基盤に位置づけられているのが、身体である。つまり、認知の基盤には、身体感覚とその発達、それにより可能になる高次の情報処理がある。だとすれば、社会性と道徳性の認知を論じる際、とくに子どもの発達段階において、身体性の議論は欠かせない。同書においても、社会性・道徳性獲得のプロセスを説明する上でピアジェの発達認知心理学に言及している (pp.195-207)。しかし、

そこでは、ピアジェの議論が感覚発達という身体性を基盤にしていた点に、注意が払われていない。

そして、これは本書の方法論上の大きな問題点でもあるが、身体教育の思想史的な蓄積がほとんど活かされていない。身体教育の思想史を振り返れば、人間形成は主要なテーマであり続けたのであり、ロック、ルソー、カントなどの思想を丁寧に検討する作業は、本書テーマにとっても不可欠であったはずである。ロックは感覚教育を論じて、理性を発現させるための第一歩目、言い換えると知的発達の開始点に身体を位置づけた。それを受け継いだルソーとカントは、感性・悟性・理性の認識論的な発達段階に合わせた教育のあり方を構想し、社会性や倫理性を獲得するための道徳教育の前段階に、経験と感覚を重視する身体教育を位置づけた。こうした身体教育の思想史的系譜を踏まえるならば、身体性を抜きにして、体育における社会性と道徳性を論じることはできない。

2-3. 教科体育の存在自体を疑わないのか

第三の批判は、これも前提となる定義上の問題として、教科体育の存在自体を疑わないのか、という点である。社会科学的研究であれば、教科体育に関連する現象を歴史的・社会的・文化的な諸変数を用いて説明・理解すれば十分である。しかし、人間形成を論じようとする本書であれば、ひとまず現象と距離を取った、規範レベルでの議論が必要なはずである。しかし、本書では、〔規定Ⅰ〕と〔規定Ⅱ〕が「体育という教科」や「体育教師」の存在を前提として組み立てられているように、教科体育の存在自体が疑われていない。そのため、教科体育の存在意義や存在妥当性が議論されず、その教科体育の存廃を含めた教育の中の体育のあり方が議論されない。また、非常に乱暴にまとめれば、昨今の諸外国の体育は良いものだ、それをもって体育の人間形成論としよう、と結論されているようにみえるが、この結論の導出過程には、ある歴史的・文化的・社会的条件の上で成立した諸現象を、評価・批判する規範レベルでの視点が見あたらない。そのため、結論の妥当性がどう吟味されたのかが、読者に十分に提示されていないのではないのか。

つまり、本書が取り組むべきだったのは、教科体育の存在自体を疑うことを出発点として、体育とそ

の上位概念である教育の関係性の議論、教育のあり方と人間形成概念の関係性の議論、人間形成概念と人間・社会の関係性の議論、というような抽象的な規範レベルの議論と、一方でそれらの議論を実感・納得できるような具体的な経験レベルの議論を、絶えず往復しながら展開させることではなかったのか。現象を追従するだけで、規範理論は構築できない。

文献

- カント (1971) 『教育学講義』 明治図書。
佐藤匠彦 (1993) 『身体教育を哲学する』 北樹出版。
城丸章夫・荒木豊・正木健雄 (1975) 『戦後民主体育の展開』 新評論。
中村敏雄編 (1997-1999) 『戦後体育実践論』 創文企画。
ルソー (1962-1964) 『エミール』 岩波書店。
ロック (1960) 『教育論』 明治図書。

